

私の生家は、神奈川県小田原のこの地に江戸時代始めより代々住み、東海道路江戸口見附の管理人をしていたので、鍵屋という屋号で呼ばれていた。父の代で十八代目と言われているが判然としない。菩提寺が何度か災厄を受けており、寺の過去帳が不完全だからである。

家系を辿ると小田原でその存在を広く知られた有為な人材もいるが、総じて何の変哲もない平民の家である。父もまさしくそうだ。明治の御世に生を享け、若くして母を亡くし、それなりの苦勞をして一家を成した。結婚してほどなく最初の妻を失い、後妻として私たちの母を迎えた頃は、大手の運送会社に勤める傍ら銭湯と小さな旅館を経営していた。後に母がその経営を引き継いだが。

父は酒が好きだった。好き以上に溺れてしまったのである。酒の上での失敗談はいくつもある。私たち子供が年頃になると、毎晩のように酔っ払って帰って来た父と諍いが絶えなくなった。父の酒の飲み方は決して快いものではなかった。飲酒に伴う父の行状は子供達にとって苦痛だった。彼の酒は家庭内に暗い易を落としていた。子供達のささいな反抗から父と子の間にはいつの間にか厚い壁ができてしまった。母はその間に立つてずい分悩んだだろう。その母が病で倒れた時、一家の主としてリーダーシップを取れない頼りない父に子供達は失望した。今から振り返って考えれば、父も悪かったが子供達も父に対する思いやり、理解に欠けていた。父は嫁いでいた長姉に、戦争中や終戦後は骨身惜しまず頑張ったが、俺ももう年だしこの窮状は俺の力だけではどうにもならない、と洩らしたとい

う。その言葉を聞いて私の胸は疼いた。

私は家の凋落をひしひしと感じた。父が退職し小さな旅館と銭湯の収入に頼っていた私の家は経済的に苦しかった。私の家は日本の高度経済成長の時代から取り残されてしまったのである。

親と子の絆は宿命的なものだ。私にとって父は善きにつけ悪しきにつけ人生の教訓者だった。私は父が生きていた間は近視眼的な見方しかできなかった。生の感情がなにより先に立った。しかし今は父の孤独感や鬱屈した気持ちも理解できる。酒を飲む父の遺る瀬ない思いが分かる。父も時の流れや時代の趨勢に囚われた一人の弱い男だったのだ。父は無言の反面教師だったが痛々しかった。

父が死んでから時々父との夢の対酌を想った。よい飲み友達になれたのにと切に考えた。父の好きだった映画や芝居の話をするのもいい。男同士で人生を語り合えただろう。兄や弟が加わればもっと楽しいものになる。父はきつと聞き上手に違いない。人生の辛酸をなめた人だったから。

父は晩年、今で言う軽い認知症になり、自分の不始末で失火を起こし、家を灰にしまった。そういう父の人生を考えると、今でも父のために口惜しい。優れた資質を持ちながら、自分の人生を開花できなかった父のために無念の思いが残る。

そういう父の許に母がなぜ後妻として嫁いだのか私にははっきり分からないのだが、母の人生はひたすら耐えることだった。井上靖が『幼き日のこと』で書いているように、父と子の間には多かれ少なかれ血の反撥のようなものがあり、そうしたものが揺り動かされた時、父に対して自分はまさしく父の子であり、父はまさしく自分の父であるというように思いに打たれる。そして例外なくある悲しみの想念がそうした父と子を支えている。父に対してその子である自分の父に対する愛情の確認のようなものである。

そこへゆく母親はいつも母親である。血の反撥があるとなかろうと、子供は母親の体内から出たのであり、母親の分身であるという事実は動かすことができない。親と子の関係を確認する必要もないし、お互いが持つ愛情というものを確かめる必要もない。

母はいつでも母であったのである。もし印象づけられることがあるとすれば、母親の悦びや悲しみに強く同感した時か、母が母でない態度を示した時、つまり子である自分が裏切られた時の悲しみとか、あるいは自分が裏切ったときであろう。そういう不自然さが心に刻みつけられた時である。

そういう訳だから、私は母に批判的な眼は持たなかった。反面父に対しては厳しい批判者であったかもしれない。父親は完全でなければいけないのであり、父のすること為すことに冷たい眼を向け、父の性質にも飽き足りぬものを感じていた。前述したように私が父と本当に融和し、父の悲哀や孤独感が理解できるようになったのは父が亡くなってからである。私の家も父親と子供の悲しいがよくあるパターンだったのだ。

父はあっさり死んでしまったが、母は長生きした。結婚してから何十年も母とは別居しており、ただひたすら彼女の最後の日々の安寧を願っていた。私達七人姉弟が曲がりなりに横道に逸れることなく、まっとうに成長できたのは常識人たる母の影響だろう。厳しさはあったが優しい理解ある母親であった。母は世間体や教育を特に重んじる女だった。最初に触れたように母がなぜ後妻として父の許に嫁いだのかは分からないのだが、母の実家は神奈川県山北町(当時は村)の素封家だった。父親は村長や郡会議長を勤めた人格者だった。その弟、つまり母の叔父は小菅家から請われて、伊勢丹中興の祖と言われた二代目の伊勢丹社長小菅丹治になった人であ

る。

私達子供が母の生前からたびたび聞かされていた自慢の父であり、叔父だったのである。母は私達の父が亡くなってからも、夫の話は殆んどしなかった。母が喜々として話すのは父親や叔父のことだった。それだけ母は嫁いできた家に希望を失っていたのかもしれない。自分の夫の腑甲斐なさには寂しい思いをしたらろうし、思いどおりに育たなかった子供達にも失望したらう。私は時々この事実を考える。と辛くなった。私もまさに母の期待を一暴切ったその一人だからである。晩年の母には真の心の支えはなかったのではなからうか。寂しい、寂しいと言いながら母は老人ホームで死んだ。まだ私達姉弟が小さかった頃の生活を回想しながら、孤独に耐えていたのかもしれない。

父と母の思い出は枚挙に遑がない。あの時こう言っただけよかったです、ああもしてやればよかったですと追想に沈む時がある。こういうのを風樹の嘆というのだらうが、今後もいろいろな形で二人は私の心の中に現れてくるに違いない。そして、今度は私が自分の死を迎えるまで、その思い出を引き摺って生きていくのだらう。

完